



## 楽しく考えるための情報環境再考

情報創造という面からネットワークに注目すると、端末としてのPCのあり方やPCとわれわれの関係を見直さなければならないことに気づく。

たとえば、情報創造の支援装置を新たにデザインしようとするれば、メッセージの効率的な伝達というスタンスとは違ったアプローチを考えなければならない。人の振る舞いの中に潜んでいる、瞬間的な「ひらめき」や「意図」を暗示する微細なアクセントを見落とさないように取り込むことが必要になる。そのための方法を考えると、現状のほとんどのPCが採用しているタイピング中心の情報入力の作法「タイピング・メソッド」は、発想やひらめきに向かおうとしているわれわれの意識を阻害するものと言わざるを得ない。

これに対してわれわれが採用すべきは、前回述べたように、落書き的な自由度を持ち、瞬間的なひらめきを記述できる「グラフィティ・メソッド」である。情報創造のためのネットワークにはこうした機能を端末の中に装置化することが望まれる。

一方、われわれが目指しているのは、メディアを介して人と人が互いに「気づき」をもたらす環境の実現だが、そのためにはユーザーと情報機器が1つのユニットとして、どのように機能すべきかを改めて考えなくてはならない。というのは、われわれはこれまで、情報や知識の供給を全面的に情報機器に依存する環境を理想としてきた経緯があるからだ。

さまざまな断片情報を手元の情報機器の中に蓄えていく。これらがネットワーク化されると、巨大な情報のライブラリーが生まれることになる。そこには知るべきすべての情報が収められており、適切に検索して組み合わせることができれば、求める情報が手に入る……。これは以前に取り上げた古典的な情報共有のモデル、「ジョハリの窓」で説明された考え方である。

この環境下では情報の蓄積から取り出しまで、人は多くをマシンの能力に依存する。われわれはこうした関係が当然だと考えてきた。人に要求される思考作業を極力小さくし、マシンというアシスタントにすべてを任せってしまうことこそが理想とされてきたのだ。

これはかつてテクノロジーが約束する未来世界として語られてきた人工知能の夢、「あなたは何も考えなくていい」につながるアプローチでもある。しかし「考える



こともマシンにまかせてしまう」なら、いったい人は何を  
するのか。われわれは単に情報を消費することだけを  
期待されているのだろうか？

それはともかく、情報共有のためのシステムでは、より多くの役割をマシンが担う。なぜなら、ユーザーが情報を理解するためには、単語よりも文章、さらにビジュアルといった具合に、より大量かつ詳細な情報を構造化された形で必要とするからだ。

これとは対照的に、情報創造に向けて機能するユニットでは、人に要求される役割の方が大きい。

思いつきやひらめきを創出することを目標とするなら、マシンが提示する情報はワープロ文書のようにリアで整合性のあるものでなくてもかまわない。求められているのは、ユーザーが振る舞いの中に託した微細なニュアンス、連想を刺激するフラグメントである。これによって別の立場、別のコンテキスト上にいる他のユーザーの発想を（たとえそれが誤解であっても）引き出すことが重要なのだ。

情報創造を支援する機器は、必ずしも従来の情報機器のように完全な形で情報を蓄積し、提供する必要はない。ユーザーとマシンの間でどのように情報を持ち合うか、という点について極端なことを言えば、マシンは気づきのための何らかのサイン……たとえば音声や身振り手振りなどの多様なスタイルを提示することでユーザーを触発できさえすれば良いのである。

外界からの情報を編集し、情報機器が表示した情報の意味を解釈し、さらに新たな情報を作り出す……結局のところ、あらゆる情報行動の基点にいるのは人である。そして、情報創造支援とはその人が楽しく考えることのできる環境をデザインしていくことに他ならない。

そう考えると、技術の都合で発展してきたPCやネットワークからいったん離れ、人間の思考や表現行動をさまざまなモードで観察し、じっくり分析していくことがますます重要に思えてくる。



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)